

2列王記2章 14 節 「エリヤの神」

1A 後継者

1B 試される召し

2B 集中

3B 特別な体験

2A 再現者

1B 神の証し

2B 神の力

3B 神の真実

アウトライン

列王記第二2章 14 節を開いてください。聖書通読の旅で、今日から私たちは第二列王記を読み始めます。午後は 1 章から 3 章を読んでいきたいと思いますが、今朝は 2 章 14 節に注目してください。

彼はエリヤの身から落ちた外套を取って水を打ち、「エリヤの神、主は、どこにおられるのですか。」と言い、彼が再び水を打つと、水が両側に分かれたので、エリシャは渡った。

列王記第二の始まりは、エリヤからエリシャへと預言の働きが受け継がれていくことです。イスラエルは、アハブが死に、そしてその子アハズヤが王となりました。しかし、アハズヤも父と同じようにバアルに仕え、主の前に悪を行なっていました。ゆえに、イスラエルにはエリヤのように神を証しする預言者が必要だったのです。

エリヤからエリシャへと神の働きがバトンタッチされる時の出来事は、実に不思議です。エリヤは、自分は死なないで主に取り上げられることを告げられていました。エリヤは、若い世代の預言者を育成するための訓練校を、エリコやベテルに置いていましたが、そこを巡回しました。エリシャは食らいつくようにして、エリヤに付いていきました。最後にヨルダン川を渡りますが、自分の外套を使って水を打つと、川が両側に分れました。それからエリヤがエリシャに、「私があなたのところから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。」と尋ねました。エリシャはすごい願いをします。「では、あなたの霊の、二つの分け前が私のものとなりますように。(2:9)」エリヤに働く神の霊を、エリシャは願ったのです。つまり、神がエリヤにご自分の霊をもって働かれたように、自分にも働いてほしいと願いました。

そしてエリヤは、火の戦車と火の馬をもって、竜巻の中で天に引き上げられました。それを見届けた後エリシャが、エリヤの残した外套を取って、今読んだ 14 節の言葉言ったのです。「エリヤ

の神、主は、どこにおられるのですか。」エリシャの必死の叫びは、神に聞かれました。神はこれから、エリヤに対して働いてくださったように、エリシャを通して働いてくださるのです。

1A 後継者

私たちキリスト者には、一つの霊の飢え渴きがあるでしょう。それは、「聖書に現れる神の働きが、今の私にも欲しい。」という飢え渴きです。神の約束やその御業に感動するのですが、それを今のこの生活の中で見出すことができない、という葛藤です。エリシャはちょうど、この葛藤を持っていました。さらに、エリシャは今のイスラエルに未だエリヤの働きが絶対に必要だと知っていました。なので、なおさらのこと、エリシャはぴったりとエリヤに付いていったのです。「ここにとどまっていなさい。」と言われても、彼は、「私は決してあなたから離れません。」と言いました。

前回の午前礼拝での説教で、テモテ第二 1 章 14 節を引用しました。「そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。」使徒パウロは、自分が間もなく皇帝ネロの前に出て、おそらくは死刑に処せられるであろうことを知って、この手紙をテモテに書いたのですが、ちょうどエリヤからエリシャに神の働きが移ったように、パウロはテモテに、自分の働きを彼にゆだねようとしていました。

私たちは、生きている神、そして聖書が書かれた時代と同じ神に直接触れることができます。イエス様の名を呼び求めれば、救われるという約束があり、聖霊が私たちを満たしてくださるのです。けれども、私たちは神との縦の関係を楽しむためには、実は横の関係をしっかりと保っていなければいけません。聖書を見れば、ただ独り神を体験したという人はまずいません。唯一、初めの人アダムだけでしょう。神がアダムを造られた時は、彼にはもちろん先例はいませんから。けれども、その他の人は必ず、神に用いられた人々から、神の教え、また神の御業を受け継いでいます。

どこからともなく現われたエリヤであっても、彼はイゼベルを恐れて旅をした時に、シナイ山にまで下って行きました。彼にとっての霊的故郷はシナイ山における、神の顕現でありました。モーセがイスラエルの民を連れて来て、主はシナイ山で火をもって現れてくださいました。モーセを通して現れてくださった神に触れるために、モーセが辿った道を歩んだのです。そのモーセも、この山で、「わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であると」という声で主に出会いました。アブラハムの生涯、イサクの生涯、そしてヤコブの生涯に現れた神をモーセは求めていました。

ですから、「私は、自分独りで神やキリストを知ることができる。」「私は私なりにキリストを信じているのだ。」と言いながら、自分が模範とするキリスト者もなしに、自分独りの生活だけを楽しんでいるのなら、真実な意味での主との出会いを見逃していることになります。

神との関係は、そのまま人との関係です。イエス様は、「主なる神を心を尽くして愛しなさい」と命じられたそのすぐ後に、「自分自身のように隣人を愛しなさい。」と言われました。使徒ヨハネはこう

言っています。「目に見える兄弟を愛していない者は、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。(1ヨハネ 4:19-20)」ですから、神を愛することと、兄弟を愛することは切っても切り離せない二つの命令であり、私たちは横との関係、特に同じキリスト者との良い関係によって、キリストご自身を知ることができます。

1B 試される召し

そこでエリシャが、どのようにしてエリヤに働く神の御霊を受けることができたかを見ていきましょう。一つ目は、「自分の召しは試される」ということです。自分が預言者として、その他の神の働きをする使命を神から与えられているのであれば、必ずその召しの真価が試されます。エリヤはエリシャに三度試しました。2 節、「エリヤはエリシャに、「ここにとどまっていなさい。主が私をベテルに遣わされたから。」と言った。」4 節、「それからエリヤは彼に、「エリシャ。ここにとどまっていなさい。主が私をエリコに遣わされたから。」と言った。」そして、6 節、「エリヤは彼に、「ここにとどまっていなさい。主が私をヨルダンへ遣わされたから。」と言った。」

エリヤとしては、主が自分をベテル、エリコ、そしてヨルダン川に遣わされていましたが、もしエリシャが神に用いられるようになるには、彼自身がエリヤに働いておられる神の導きに従わないといけません。そのために、エリヤが行くからと言って自分が行くというのではなく、どんなことがあっても、いや断られても、それでも行くという献身が必要になります。エリシャのそれぞれへの答えを見てください。すべて同じですが、2 節、4 節、6 節とも全て「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません。」となっています。

私が初めて、自分が御言葉の奉仕者として献身したいと教会の人に表明した時に、その時にちょうど他の教会からゲストで牧師さんがいらしていました。私に対して、かなり辛辣なことを言われたのを覚えています。その内容はすっかり忘れてしまいましたが、一晩中泣いて眠れなかったことを思い出します。後から心配してその牧師さんが電話をかけてくださり、祈っていただきましたが、その時の私は、なんでそんな意地悪なことをするのかと正直、憎たらしくなりました。けれども、エリヤがエリシャに対して行ったことを、行ないたかったのだらうと思います。主に召されている者は、必ずその召しの真価を試されるということです。

この召しは奉仕に限らず、キリスト者として天に召される、救いを受けているということでも試されていることは覚えておく必要があります。「信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称赞と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。(1ペテロ 1:7)」

2B 集中

そしてエリシャが、神の御霊の働きを受け継ぐ二つ目の方法は、「集中していた」ということです。預言者の仲間から、エリシャは声をかけられました。3 節を見てください。「すると、ベテルの預言

者のともがらがエリシャのところに出て来て、彼に言った。「きょう、主があなたの主人をあなたから取り上げられることを知っていますか。」エリシャは、「私も知っているが、黙っててください。」と答えた。「黙っててください、と言っています。ベテルだけでなく、エリコでも同じ質問を受けました(5 節)。けれども、そのようなことを聞いているその瞬間に、エリヤを神がどこかに取り去ってしまうかもしれない、と思って、預言者らの気づかいの言葉を振り払ったのです。

神の霊の導きや働きを、自分も受けたいと願うキリスト者は健康です。その時に必要なのは、集中力です。今、主が働いておられる事柄を注視し、そこから目を離さないでいることです。ヘブル書 12 章 2 節に、「**信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。**」とあります。私たちがスポーツに興味があるなら、その試合は決して最初から最後まで見逃しません。いや、最初をたとえ見逃しても、最後だけでは絶対に見落としてはいけません。それと同じです。信仰の始まりとは、イエスが誕生されてからのことです。そして、この方がどのような死を遂げて、そしてよみがえるか、さらに天に昇られたのか、この方の生涯から目を離してはいけません。

私たちの生活そのものが、イエス様を知っていく生活です。もし皆さんの心の中で、イエス様を知っていくことを行なっていなければ、それは無駄な時間を過ごしてしまったと言えるでしょう。イエス様の生涯はもちろんずっと同じです。けれども、私たちの人生の中で通ってきたことを通して、自分が主から知られているように、自分も主を知るようになるのです。この方を知るようになれば、今、起きている事柄において主に自分が何を命じられているかを知るようになります。

3B 特別な体験

そして、神の御霊の働きを受け継ぐ三つ目の方法は、「特別な体験」あるいは「親密な体験」です。エリシャは、エリヤが天に上っていく様子を最後まで見る事ができました。それができなかつたら、エリヤの霊の二倍の分け前を受け取ることはできません。そして、この体験は他の預言者のともがらには見えなかったのです。エリシャだけが知っているものでした。

似たような体験をした人に、使徒パウロがいます。彼はダマスコに行く途上でしたが、復活されたイエス様に会いました。その時に使いの者たちは、音は聞こえたが、声は聞こえませんでした。パウロは、ずっとイエス様と会話していたのです。このような親密で、他の人には分かち合えない秘めた神との出会いを、神に用いられている人はしています。その出会いが必ずあります。パウロはこの他に、コリント人への手紙第二 12 章で、自分が、「人間には語ることの許されていない、口に出すことのできないことばを聞いた」と言っています(4 節)。このような光栄にあずかれたので、彼はその後の強い体の痛み、あるいはその他の肉体のとげを耐え忍ぶことができました。

主に用いられた人は、その体験に立ち戻る事ができました。ヤコブがそうでしたね。ベテルは、「神の家」という意味ですが、彼がエサウの手から逃れ、母リベカの家に行こうと旅立ち、そして石の枕で野宿していたときに、天からの梯子を彼は見たのです。その体験があったので、二十年後

にも同じところに戻るように、とのことでした。そして彼はたった一人で、御使いと格闘して、それで「イスラエル」という新しい名が与えられたのです。

ですから、御霊の働きを自分の受け継ぎたいと願うのであれば、「召しが試される」「イエスをじっくり見て、目を離さない」そして、「親しい神との出会いをしている」ということであります。

2A 再現者

それでは次に、エリシャにとっての願い、そして私たちにとっての願いでもあります。『エリヤの神、主はどこにおられるのですか。』という叫びです。ここでエリヤに働かれた神が、もうその働きをやめてしまうようなことはあってはならない。主よ、あなたはこのエリヤの働きを続けなければいけません、という心からの叫びでした。つまり、エリヤの働きを再現しなければいけないと願ったのです。

1B 神の証し

具体的にはエリヤの神の再現とは、何でしょうか？エリシャが必要としていたのは、何だったのでしょうか？一つは「神の証し」です。アハブが、バアル神を拝むようになり、イスラエルが周囲の国と何ら全く変わりないようになってしまいました。ところが、彼は三年間、雨が降らなくなると言って、その言葉通りになりました。そのことによって、主が生きておられることを証しました。

彼の神の証しは、並大抵のことではありません。まったくイスラエルに神が追いやられている時に、真っ向から対立する形で、神が生きておられることを示しました。エリヤの神と私たちが叫ぶのであれば、この世の流れとは全く正反対の方法に自分が歩んでいることによって、神が生きておられることを証しすることができる、ということです。

皆が嘘をついているところで、自分だけが真実を話します。誰もが行なっている罪があっても、自分だけがそれを行ないません。誰もが無視しているような人であっても、自分だけはイエス様になってその人に目を留めます。「他の人がやっているから、私もやる。」と言っている限りはその人は神の証しを立てることはできません。

2B 神の力

次にエリヤの神の再現とは、「神の力の現れ」です。エリヤの祈りは、力のあるものでした。雨が降らず、そして雨がまた降りました。バアルの預言者との対決では、祈りによって天から火が降りました。神が祈りを聞かれる方であることが分かります。

いかがでしょうか、私たちは祈りの力をどこまで信じられているのでしょうか？私は、まだまだきちんと信じていないと告白せざるを得ません。おととい、ニュースで、「イランで家の教会運動を指導していたサイド・アベディニ牧師からの手紙」という記事を読みました。サイド・アベディニさん

は、アメリカとイランの二重国籍ですが、イスラム教徒からクリスチャンに回心して、家の教会の指導者でしたが、国外追放になり、そしてアメリカに在住、市民権を得ました。実は彼はアイダホ州にあるカルバリーチャペルで牧師の按手を受けています。そしてイランに戻り、孤児院を始めようとしたところ、捕まり、八年の禁固刑が出ました。

ニュースは追っていたのですが、私はもう駄目だなとあきらめていました。すると、なんと奇跡的に手紙が奥さんのところにまで届いたのです。それは、彼の喜びの手紙で、この苦しみのおかげで、神はいろいろな教団の違いを越えて祈る心を与えてくださった、として励まされているとのこと。他の囚人は、彼の顔が輝いていると証言しているそうです。精神的におかしくなっていたのではないかと私は思っていたので、自分を恥ました。祈ることに力があります。

3B 神の真実

そしてエリヤの神の再現とは、「神の真実」であります。神はご自身が生きていることを表し、ご自分の力を現すだけでなく、最後の最後まで裏切らない方、真実な方であることを示してくださいました。彼がシナイ山に逃げた時も、神は細いかすかな声でエリヤに語りかけ、そしてエリヤに会うことを命じられました。そしてついに、エリヤに自分のしていることを受け継ぐことができました。もし、神が忍耐のない方であれば、神はとうの昔にエリヤを見捨てておられたはずで

使徒パウロは言いました。「主も、あなたがたを、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところのない者として、最後まで堅く保ってください。神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。(1コリント 1:8-9)」主に熱心に仕えている中で、私たちがエリヤのように途中で燃え尽きてしまうことがあるかもしれません。いつの間にか自分のやり方で主に仕えようとしてしまい、あるいは神の恵みから外れて行ってしまったかもしれません。けれども、神は真実な方です。この方は必ず、責められるところのない者として、主イエスが戻って来られる時にまで堅く保ってください。

私たちが、エリヤの霊を熱心に求めなければいけません。他の大勢がどんなに右に向かっても、自分だけは左を歩くという証しを立てる心備えです。そして、祈りによって神の大きな力を求めることです。さらに、神が自分を確かに堅く守ってくださるという確信が与えられなければいけません。